

【資料とその解説】

「豐子愷の「縁縁堂蔵書」について」(西槿偉)
付録「縁縁堂蔵書目録」(西槿偉・林素幸・呉衛峰)

西 槿 偉

On Feng Zikai's Library

Isamu NISHIMAKI

要旨

Modern Chinese writer and painter Feng Zikai (1898-1975) had a library of 10,000 to 20,000 books before the Sino-Japanese war, but the library couldn't escape the destruction by the war. However, a small part of his postwar library is still preserved at Yuan Yuan Tang Museum. This collection of books is invaluable in the study of the art and literature of Feng. In this essay, I will try to demonstrate the significance of the collection. The catalog of this collection of books will be useful for the research on Feng Zikai.

キーワード：豐子愷、縁縁堂蔵書、夏目漱石

はじめに

近現代中国を代表する知識人の一人豐子愷(ほう・しがい 一八九八—一九七五)の旧蔵書の一部が、一九八五年に再建されたその旧居「縁縁堂」——現「縁縁堂記念館」(図1、浙江省桐郷市石門鎮)に保存されている。その数は多いとはいえないが、豐子愷の文学、絵画、翻訳などを研究するための貴重な資料であることは間違いないだろう。二〇〇八年八月末、「豐子愷に関する比較文学研究」の一環として、

筆者は林素幸(台湾樹徳科技大學助理教授)、呉衛峰(東北公益文科大学准教授)両氏とともに、縁縁堂記念館が収蔵する豐子愷の旧蔵書を調査した。

その成果となる「縁縁堂蔵書目録」を掲げるに際し、豐子愷の蔵書が今日に伝わる経緯、そしてこれらの蔵書の意義について、これまでの調査を踏まえて述べることにしたい。



図1 大運河のほとり、春秋時代の呉と越の国境に位置する浙江省桐郷市石門鎮にある「縁縁堂記念館」。復元された豐子愷旧居の横に「豐子愷漫画館」が増設され、その一階には豐子愷の人生と芸術についての常設展、二階には企画展のための展示スペースがある。撮影・呉衛峰

一 日中戦争と「縁縁堂蔵書」

豊子愷がみずからの居室に「縁縁堂」と名付けたのは一九二七年一〇月、ときに彼は上海で仮住まいをしていた。毛筆のタッチを生かした抒情漫画で人気を博していた彼は、その後小品文にも筆を染め、一九三一年に初の文集『縁縁堂随筆』を上梓する。翌年、教職を辞した彼は創作や翻訳に専念し、翌々年の一九三三年故郷石門湾に念願の新居を建て、文人豊子愷の理想の住居「縁縁堂」が誕生したのである。縁縁堂での充実した文筆生活は長く続かなかった。日中戦争が勃発したからである。一九三七年一月、石門湾が空爆され、戦火が及んできたところで、豊子愷一家は縁縁堂を放棄し、疎開の船に乗った。その後、縁縁堂はやがて戦火を免れず、蔵書のほとんどが灰燼に帰した。縁縁堂の蔵書を振り返り、豊子愷は後にこう書いている。

床にタイルを敷き詰めた西側の部屋はわたしの書斎で、数千巻の書籍を棚に並べていた。(中略)二階に上がり、前方の部屋はわたしと子ども二人の寝室で、そこにも書物は数千巻あった。同じく二階の西側の部屋は仏堂で、四方の壁は經典ばかりであった。^{注1)}

漫画と小品文の制作だけでなく、西洋美術や音楽の啓蒙者としても多くの著作や翻訳を公開していた豊子愷は、実に豊富な蔵書を持っていた。また、彼は李叔同(一八八〇—一九四二、一九一八年に出家)に私淑し、仏教に強い関心を示していたため、その蔵書に多くの仏典が含まれることも頷ける。書物の中身について、豊子愷がもう少し詳しく触れているところがある。

そこ(縁縁堂を指す——引用者注)にはわたしの蔵書があり、全

部で一、二万巻あっただろうか。音楽、美術、文学、宗教、教育などの分野にわたり、中文、英文、日本語など言語も様々である。それから、貴重な絵画や、わたしが教わった弘一法師が出家の際記念にくれた書物や記念品もあった。^(注2)

失った蔵書ゆえ、その数を概数でしか表せなかったのだろう。この蔵書こそ、彼の多分野における活躍を支えていたものであり、それに戦後すぐ再入手できるとは限らなかったことも考えれば、戦争が豊子愷の文化活動に与えた打撃は想像にあまりある。また、彼の知的体系の形成を知ろうとする今日の研究者にとって、かけがえのない資料を失ったことになる。

二 現存する「縁縁堂蔵書」

戦後、豊子愷はふたたびその蔵書を増やしていったことはいうまでもない。しかし、一九七五年に没すると、その多くは子女の手に渡り、三十年以上経った今日その目録作りは至難の業といえる。幸い、豊子愷の末娘の豊一吟(一九二九—)氏は、父親の旧蔵書を一部縁縁堂記念館に寄贈し、わたしたちはそれを調査することができた。今回作成した「縁縁堂蔵書目録」は主にそれに基づく。実に様々な問題を解決する糸口となりうる、豊子愷旧蔵書的重要性を強調するためにも、ここで初歩的な考察を行ないたい。

(1) 日本留学時(一九二一)に購入したドイツ語教材

豊子愷は一九二一年春から十ヶ月ほど日本に留学し、同年末帰国した。彼がどのような書物を携えて帰ったのか、今までほとんど知られていなかった。それだけに、縁縁堂記念館が所蔵する、独逸語学雑誌

社編『独文読本 卷一 講義』(精華書院、大正二年(一九一三)四月初版、大正一〇年(一九二一)六月第一版)は注目に値する(図2)。

同書表紙の見返し上方に鉛筆で「1921 8 13 Tokio」とあり(図3)、また百三ページにも「十年九月十八熟読」との鉛筆メモがある。「十年」とは民国の「十年」で、「一九二二年」に相当し、同書は東京滞在中に購入

されたと考えられよう。さらに、表紙の裏側の見返しには毛筆による人物頭部の小さな墨画が貼りつけられ、「1959.3.30 Shanghai」との添え書きもあることから、本書は持ち主にとって特別な一冊であることがわかる。

書き込みが多く、豊子愷が東京で熱心にこのドイツ語リーダーを用いて学習した様子がうかがえる。購入して一ヶ月あまりで、二四三ページの教材の大半を「熟読」したように見受けられることから、彼のドイツ語学習熱が伝わってくる。

このほか、独逸語学会発行『独逸語独修』(大正九年(一九二〇)六月初版、同年二月第四版)や年岡長汀訳注『独和对訳 グリム十五童話』(南江堂、一九二〇年)も同じく緑縁堂記念館所蔵にあり、書き込みや刊行年などから考えれば、この二冊も豊子愷みずから東京



図2 1921年、豊子愷が東京留学中に購入したドイツ語教材、撮影・西槇偉

で購入した可能性がある。

さらに、豊子愷の三男豊新枚(一九三八—二〇〇五)が所蔵していたものに、ツルゲーネフ著、上村静淵訳注『独和对訳初恋』(南山堂、大正二年(一九一三)一月初版、大正九年(一九二〇)五月第四版)も、豊子愷が留学から持ち帰った可能性がある。同書に見られる多くの書き込みは豊新枚によるものだと豊一吟氏は語るが、一九二二年豊子愷は日本から帰国直後英和对訳『初恋』をもとに中国語訳をしていたことを思えば、同書の入手は留学中あるいは帰国直後と考えられよう。

上記四冊ほどのドイツ語学習書はいずれも薄い冊子で、疎開の際携帯するに軽便のため、戦火を免れたのだろう。また、日本滞在中のドイツ語学習はあまり知られていなかっただけに、これらの教材類の存在が豊子愷の新たな側面を映し出すものとして資料的な価値はきわめて高い。

(2)「研究社英文訳注叢書」と「商務印書館英漢对照名家小説選」

緑縁堂記念館所蔵の豊子愷旧蔵書のうち、英和对訳あるいは英漢対訳のリーダーが多く含まれる。それというのも豊子愷はこうした独学



図3 同教材の表紙裏、鉛筆の筆跡は「1921 8 13 Tokio」と読める。撮影・西槇偉

用の対訳文学作品を好んだからである。「日本にはさまざまな英和対訳叢書があり、左ページが英文で、右ページが日本語で、下方に語注が施してある。わたしはそうした叢書にかなり恩恵を蒙った」と、豊子愷が語学習得体験として語っている。そのゆえに彼は Stevenson と夏目漱石の名を上げて、その作品を「熟読」することによって、語学のみでなく文学への理解も得られたと述べている。

現存する英和対訳本には「研究社英文訳注叢書」がほとんどを占める。Stevenson, R. L. 原作、左右田実訳注『A Child's Garden of Verses 幼年詩園』（研究社、一九三〇年九月発行、一九三三年五月第三版。（研究社英文訳注叢書））に見える、「二六六年九月四日読完（一九三七年九月四日読了）」という書き込みや図書の刊行年から、同叢書の入手は日中戦争の開始よりも前と思われる。すなわち、これらの対訳本は戦前の「縁縁堂蔵書」なのである。すでに日本軍の上海攻略が始まり、石門湾上空にも日本空軍機が飛来していた頃、豊子愷はステイヴンソンを読んでいたということだが、購入して間もない（一九三六年一月刊行のものもあり）このシリーズを、疎開先まで携えていった可能性も考えられる。

ステイヴンソンのほかに、Barrie, James Mathew 著、平田喜一訳注『Peter Pan ピーター・パン』（研究社、一九三〇年三月。（研究社英文訳注叢書））には「二六六年一月一日読畢（一九三七年一月一日読了）」の書き込みがあり、この一ヵ月後に彼は故郷と縁縁堂を後に避難の旅に出るのである。それから、Hawthorne, Nathaniel 著、青木常雄訳注『Biographical Stories 伝記物語』（研究社、一九二九年一月発行、一九三五年八月第二版。（研究社英文訳注叢書））や、Poe, Edgar Allan 著、大橋栄三訳注『Prose Tales ポー短篇集』（研究社、一九二九年一月発行、一九三六年九月第二版。（研究社英文訳注叢書））、そして Wells, Herbert George 著、村上貢訳注『Tales of

Wonder 驚異の物語』（研究社、一九二九年一月発行、一九三三年八月第六版。（研究社英文訳注叢書））なども書き込みなどから判断し、相当読み進んだものと見受けられる。

同叢書所収の Hearn, Lafcadio 著、荻原恭平訳注『Kwaidan 怪談』（研究社、一九三〇年三月発行、一九三六年八月第二〇版）が見出されたことも興味をひく。書き込みこそないが、表紙カバーはなくなり、本の状態からよく読んだのではないかと推測される。豊子愷はハーンの『Insect Literature 虫の文学』（大谷正信訳注、小泉八雲文集第四編、北星堂、一九二一年三月）と『Sea Literature 海の文学』（大谷正信訳注、小泉八雲文集第六編、北星堂、一九二一年七月）に言及したことがあるだけでなく、前者から影響を受け、複数の小品文を創作したとも考えられるため、彼がハーンの著書を所蔵していたということは非常に重要な事実なのだ。

豊子愷が読了した Stevenson, R. L. 著、左右田実訳注『A Child's Garden of Verses 幼年詩園』が偶然現存するが、彼がステイヴンソンに注目したのはもっと早いはずだ。漱石とともにステイヴンソンを「もっとも熟読した材料」だと回想したのは一九三〇年の末であり、彼は『自殺クラブ』を訳注したこともある。ステイヴンソンが豊子愷の愛好した作家となるが、両者の文学に関連があるのだろうか。漱石文学が豊子愷に重大な衝撃を波及したことは明らかにしつつあるのであり、ステイヴンソンとの関わりは豊子愷研究の課題として取り組むべきであろう。

五四以後中国新文学の旗手の一人であった豊子愷における外国文学受容の様相が究明されることが望まれるが、その際英和対訳文学書が存在に留意しなければならない。彼は早くからそれに着眼し、そこから「少なからぬ恩恵を蒙った」からだ。英和対訳『初恋』をもとに、英漢対訳『初恋』（上海開明書店、一九三一年）を著したというだけ

でなく、対訳叢書に含まれる文学作品が彼の創作にさまざまな烙印を残したのではなかったろうか。

元来語学教材であった英和对訳叢書は、豊子愷にとってよい文学作品のセレクトシヨンであったわけだ。もちろん、彼も語学教材としてそれを用いた。Kipling, Rudyard 著、福原麟太郎訳注『Just so Stories』なるほど物語(研究社、一九二九年一月発行、一九三〇年九月再版。

(研究社英文訳注叢書)の表紙に、「二六年四月一二起陳宝日修毎日至少一五頁(一九三七年四月一二日より陳宝の日課として毎日少なくとも一五頁)」との書付があり、豊子愷は長女の教科書として同書を指定していたことがわかる。同書には、豊陳宝によると思われる単語調べなどの書き込みがある。

以上のように、英和对訳叢書の中から豊子愷またはその子女に読まれたものは多い。一方商務印書館が刊行した「英漢对照名家小説選」のほうは、書き込みはうんと少ない。それらの刊行年は一九三〇年代半ばだが、購入の時期は人民共和国成立後であろう。なぜなら、裏表紙には「特価人民幣1000元」などと記したスタンプが押されているからだ。建国後、豊子愷はロシア文学、日本文学の翻訳に精力を注ぐようになっていった。

(3) 豊子愷と『漱石全集』

緑縁堂記念館所蔵「豊子愷旧蔵書」のうちの『漱石全集』について、筆者は別稿で簡略に触れたことがあり、そこに図版を三枚載せた。豊子愷と漱石文学の関わりを検証するうえで極めて重要な資料ゆえ、ここで豊子愷と『漱石全集』、そして緑縁堂記念館所蔵の『漱石全集』について、もう少し詳しく紹介したい。

現存する『漱石全集』は戦後豊子愷が再入手したもので、戦前彼はすでに『漱石全集』を所蔵していたと思われる。それというのも、彼

は一九三五年雑誌『人間世』の新年特集アンケートに、一九三四年の愛読書として『漱石全集』を挙げたからである。^(注6)この全集は疎閑に携帯していくことができず、今日に伝わっていない。ただ、この全集の購入時期について、筆者は次のように推論する。一九二六年、豊子愷が「法味」を創作し発表するが、この小説の前半が参照したと考えられる「初秋の一日」は単行本未収録で『漱石全集』に初めて収められた作品であるため、この時点で豊子愷は少なくともそれを収録した『漱石全集』第九巻を所持していたことになる。それまでに刊行された『漱石全集』には二つの版があり、そのいずれかを豊子愷が入手していたと考えて間違いない。彼がどこでそれを購入したのかといえ、留学先の東京または上海の内山書店と考えられる。しかし、漱石文学の影響が顕著に現われる時期が一九二六年以降ゆえ、後者の可能性が高い。

したがって、現存するのは豊子愷にとって二セット目の『漱石全集』である。その購入は上海の内山書店においてで、時期もほぼ確定できる。なぜなら、書店主内山完造(一八八五—一九五九)がその間の事情を書き残したからである。内山は魯迅をはじめ近代中国の知識人の多くと親交を結び、豊子愷とも親しかった。戦後、疎閑地から杭州に戻った豊子愷は彼を訪ね、『漱石全集』を求めた。その一部始終を内山は次のように回想する。彼が建国後に上海を再訪し、豊子愷などと再会したことを記した「豊子愷先生」からの引用である。

(前略) 豊子愷先生には私は忘れられない感謝がある。それは終戦の翌年四月から、私は千愛里の住宅を引き上げて呉淞路義豊里の一六五号という、かつて私が初めて世帯持ちした家に移り住んで、亜東協会会長賀耀祖、副会長彭学沛両先生の依頼を受けて協会図書館用の日本書籍を集収して居った。ある日一人の娘さんを

伴れて豊子愷先生が来られて「内山さん、『漱石全集』はありませんか」と聞かれたので、ちょうどその時、三冊欠本の十七冊の物があつたので、その事をつけると、先生は「それでよろしい。もし欠本の補充が出来たら送って下さい。いくらですか」といわれたので私はCNCの十七万円にして置きますというところと先生は「安いですね、ありがとう、ありがとう」と自分で提げて帰られた。むろんお金も下さったし、その後のことについても「内山さん帰るなさんな、上海に居りなさい。友達も沢山居るから生活の心配はありません。安心して居りなさい」ともいうて下さったことは今も覚えて居るが、その後欠本の一冊が出て来たので早速石門湾の先生のお家へ郵送した。そして代金は一冊一萬元と書いて置いたのである。ところが数日後に先生から書留郵便が来たので、一萬元送って下さったのだと封を切って見た処郵便為替十萬元と手紙があるので、見ると、これはしたり

内山さん、漱石全集の欠本一冊受け取りました。あの全集はあまり安すぎますから、ここに十萬元送りますからどうか受けとって下さい。

ということが書いてあつたのには私はびっくりしたが、然し考えさせられたのである。^(注9)

やや長めの引用となったが、『漱石全集』をめぐって、豊子愷と内山完造の間に心温まるエピソードがあつたのだ。十倍もの代金を支払ったのは、敗戦国の国民として上海で書店を営む自分への同情からだと考えた内山は感涙にむせぶのであるが、豊子愷としては旧友ともいふべき『漱石全集』に再会できた喜びから、逆に感謝を表そうとしたのかも知れない。それはともあれ、事実関係をただしてみると、まず、内山の文脈から豊子愷が『漱石全集』を求めに来たのは一九四六年の春から夏にかけてと読めるが、その頃彼はまだ重慶で帰還の船を待つ

ていたのであつて、上海のほうに帰ってくるのは九月になつてからだ。同年秋、上海で個展を開いた豊子愷は、展覧会を見に来た内山と再会する。このことは内山の回想文にも見え、全集購入時の対面は展覧会(注10)のとき以来だと内山も認めるので、一九四七年春とすべきであろう。

なお、内山がいうところの欠本の冊数が正確であれば、豊子愷は全二〇巻のうち一八巻を手にしたことになる。縁縁堂記念館に一四巻のみ残るのは、その後さらに四巻散逸したということである。それらを今後追跡調査するとし、残る一四巻の状況を見ておくことにしよう。

まず一四巻の収録内容と刊行年を列記しておく（発行は漱石全集刊行会）。

- 第三巻、短編小説集下巻、草枕、野分、一九二九年五月
- 第四巻、虞美人草、坑夫、一九二八年四月
- 第七巻、彼岸過迄、一九二八年一〇月
- 第八巻、行人、一九二九年三月
- 第九巻、心、道草、一九二八年
- 第一〇巻、明暗、一九二九年九月
- 第一一巻、文学論、一九二八年十一月
- 第一二巻、文学評論、一九二九年六月
- 第一三巻、小品、一九二八年五月
- 第一四巻、評論雑篇、一九二九年二月
- 第一七巻、日記及断片、『刊行年月未詳』
- 第一八巻、書簡集、一九二八年九月
- 第一九巻、続書簡集、一九二九年四月
- 第二〇巻、別冊、一九二九年八月

このうち第七巻、第二〇巻に所有者のものと思われる蔵書印が見られ（第七巻に「三好蔵書」、第二〇巻に「廖一雄蔵書」、同全集は古本であつたことがうかがえる。しかし、筆跡などから豊子愷以外の

書き込みはほとんどないと判断される。書き込みがあるのは、第三巻、第七巻、第八巻、第九巻、第一〇巻、第一三巻である。「196831読畢(読了)」とのメモ書きが見える巻(第八巻)もあり、豊子愷は漱石の主要小説にほとんど目を通したと見受けられる。

中でも、注目したいのは第三、九、一〇、一三巻である。第三巻所収『草枕』の扉ページに「豊子愷」という印が端整に押され、第九巻にも「豊子愷居日月楼」との印がある。彼は特にこの二巻を重視していたにちがいない。第一三巻には印は押されていないが、扉ページには万年筆で「1867-1927」と大きく書かれた筆跡が見える。これは漱石の生没年を豊子愷が覚え違いをした形で書いたのだろう。生年は正しく、没年が「1927」となったのは、正しくは「1916」となるところの「16」が豊子愷の記憶の中でいつの間に「民国16年」となったのではないかと推測される。

勘違いをしたままのメモ書きは、別の辞書の扉ページにも書き込まれている(図4)。そこには竹久夢二の生没年も並べて書かれており、この二人は彼の文学と絵画にとってとりわけ重要な存在だったのである。

さて、『草枕』を豊子愷は一九五六年に翻訳し、一九五八年六月人民文学出版社から刊行した。彼は『草枕』を愛好し、そ

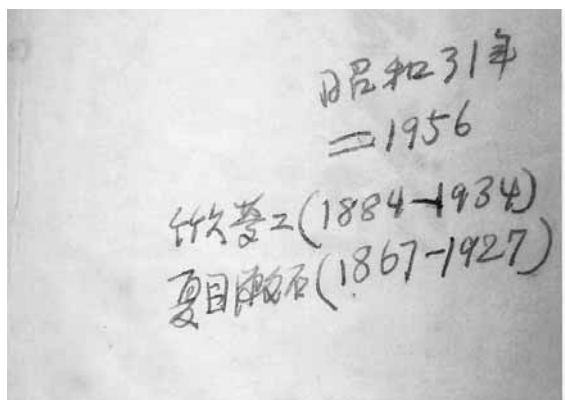


図4 新村出編纂『言苑』博文館、1938年2月19日発行、1938年5月10日第30版の巻頭ページにみえる豊子愷の筆跡、撮影・西横偉

こからさまざまな感化を受けたことは別稿で論じたので、詳しくはこちらを参照されたい。^(注1)ここで豊子愷手沢本『漱石全集』第三巻の状態と書き込みなどについて、もう少し述べたい。

第三巻はカバーが本体から外れかかっており、他の巻に比べて書籍が著しく疲弊している。晩年になって、豊子愷が再度『草枕』を翻訳したということもあり、この巻の使用頻度が高く、それで本が傷んだものと思われる。『草枕』扉ページに押印があるほか、後方見返しに豊子愷自筆の漫画が貼り付けられたところも特色である(図5)。獅子頭を黒色ペンでスケッチし、後方に双蝶の形を先につけた枝状のものが置かれている。獅子舞の「蝶の舞」に使われるもので、ユーモラスに描かれ、線が簡潔で力強い。

また巻末見返し前のページに日誌風のメモが鉛筆で書き付けてある(図6)。日付と曜日の組み合わせ、それに判読できる情報を総合して考えると、一九六九年十一月一日(土曜)から二二日までの週間日記メモとも思われる。ところが、同年十一月五日に、豊子愷が三男豊新枚に与えた書簡が残っており、それと照合するとやや疑問が残る、即断することは避けるべきであろう。ただ、判読できるところによれば、豊子愷は体調がすぐれず、治療を受けていたようだ。

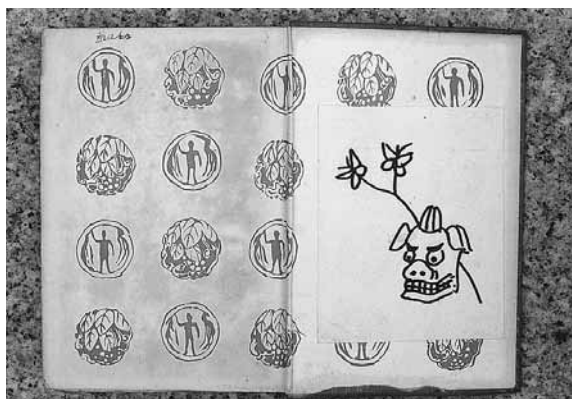


図5 豊子愷旧蔵『漱石全集』第三巻、巻末の見返しページ、撮影・西横偉

第三巻本文への書き込みや傍線は多い。書き込みの多くは、翻訳の際のメモと思われ、本文への批評はあまり見られない。傍線の引き方を見れば、豊子愷が作品のどこに共感を覚えたかがわかる。よって、傍線部は豊子愷の『草枕』理解を知る手がかりとなるであろう。

次は第一三巻。この巻は『永日小品』『満韓とくろく』『思ひ出す事など』『硝子戸の中』など、漱石の小品文、連作小品集を収める。豊子愷の書き込みは多くないものの、赤い丸印や傍線はかなり見られる。印象的な書き込みとしては、「文鳥」タイトルの下方に「芙蓉」という鉛筆書きの二文字が挙げられる（二三ページ）。ほかに単語調べの書き込みがあるのは「元旦」「過去の匂ひ」「霧」「ケーベル先生」であり、表題上方に赤い丸印が付けてあるのは「暖かい夢」「モノリサ」「金」「変化」「クレイク先生」「手紙」である。豊子愷は漱石の小品文に創作の材源をいろいろ得たと思われ、赤丸つきの作品しか読まなかったということは考えられまい。晩年に彼は赤丸をつけた作品を再度「熟読」したのだろうか。

『思ひ出す事など』には傍線が数箇所、『硝子戸の中』にも赤い傍

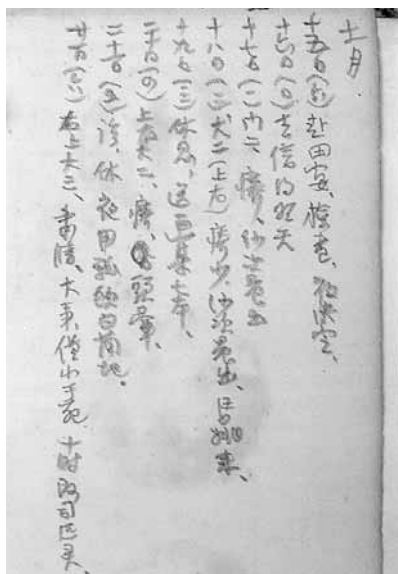


図6 同前書巻末ページ上方への鉛筆メモ、撮影・西横偉

線が引かれている。これらの連作随筆、特に後者は豊子愷が文学創作を開始し、小品文を発表し始めた頃にすでに参照したものと考えられるゆえ、晩年にまた読み直したのであろう。彼の最後の随筆集『縁縁堂続筆』は過去の体験を回想したことを中心にした連作小品群だが、『硝子戸の中』とつき合わせて読むと、非常に興味深いに違いない。

このように、第三巻所収『草枕』、あるいは第一三巻所収の数々の小品文には「読了」といったメモ書きは見られないが、それがかえって豊子愷が長年かけて何度も読んできたことを示すのではないだろうか。第一三巻も本の綴じ方が緩くなっており、そうした本の状態もそれを物語っているのである。

このほか、特筆すべきは第九巻と第一〇巻。第九巻扉ページに「豊子愷居日月楼」との印があることは述べたが、『道草』の冒頭、同書二五五ページに「毎面800字 800頁共5万」とあるメモ書きに注目したい。すなわち、「ページ五八〇字、二六〇ページで一五万字」という意味だが、それは翻訳計画が脳裏に浮かんだときに豊子愷が計算をしてみたものであろう。翻訳の際、47字×17行で一ページ799字の日本語原文は中文五八〇字となり、全体で一五万字となる計算である。翻訳にかかる時間をはかるためにも、発表する媒体を探すためにも作品の規模を示す総字数が必要だ。結局、計画は実行されなかったと思われる。とはいえ、漱石晩年の作品『道草』を豊子愷が高く評価していたことがそれによってうかがい知れるのである。

第一〇巻は漱石最晩年の未完作品『明暗』を収め、豊子愷による書き込みや傍線は相当見られる。まず、この巻の扉ページに豊子愷は『縮約 日本文学大辞典』（藤村作編、新潮社、一九五五年一月）から「夏目漱石」の項目を中国語に訳して、抜書きをしたものが目を引く。青のインクで三項目に分けて書かれ、『明暗』という書名が現れたところに赤の傍線が付されている。つまり、豊子愷はここで改めて漱石

の生涯と作品『明暗』の定評を文学辞典で確かめようとしたのではな
いか。それはなぜかといえば、作品への理解を助けるためとも考えら
れるが、一つの可能性として翻訳の意欲が彼にあったとも推測される。

(4)「文学」と「絵画」

豊子愷は小品文と漫画を創作活動の中心とし、文学と絵画は彼にお
いて決して無関係ではなく、互いに関わりあうものでもあった。それ
は今後さまざまに論じられるべき問題であろう。残る彼の蔵書にもそ
れについて考えるヒントが隠されている。

筆者は豊子愷漫画の図像来源を探り、竹久夢二、北沢楽天、岡本一
平などの日本の画家、あるいはジャン・フランソワ・ミレ、フィン
セント・ファン・ゴッホなど西洋の画家との関わりを検証してきたが、
彼の漫画は文学テキストとも強い関連をもつのである。その表れとし
て、彼には古典詩文を画題または素材とする作品が多く、そこで文学
と絵画が結びつくわけだが、その結びつくプロセスを説明すれば、豊
子愷絵画のもう一つの特色が明らかになるであろう。

豊新枚蔵『歷朝名人詞選』は、豊子愷による朱筆の圈点が多く見ら
れ、頁上方欄外に「描」「画」といった書き込みも多々ある(図7)。
圈点をしたところに注目すれば、実際画題に使用された詩句もあり、
豊子愷の絵画制作を考えるうえで、非常に重要なテキストといえるの
ではないか。

また、今回の調査で『護生画集』と関連の深い書物を発見すること
もできた。同画集には古典説話に取材した絵画が多数収められている。
そうした古典説話などの典拠となる書物は残されている。たとえば、
『両般秋雨盞』(豊新枚蔵)、『広四十家小説』(呉浩然蔵)や『説苑』
(葉瑜蓀蔵)には赤丸印の横に「護生」という書き込みは複数あった。
それらは果たして描かれたのか、確かめる必要があるが、画材となる

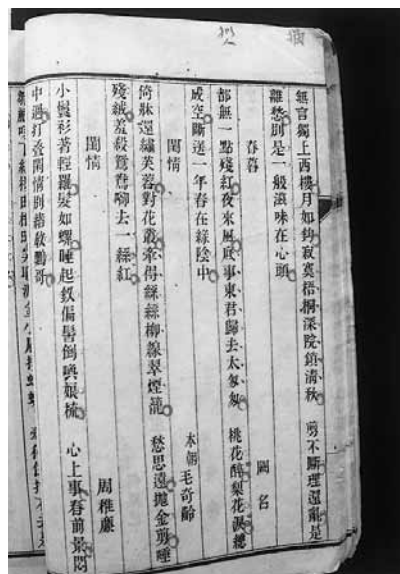


図7 豊子愷旧蔵『歷朝名人詞選』2冊、上海圖書館現存。この「描」「画」という文字は、豊子愷の「護生」の筆跡とみられる。この「護生」は、豊子愷の「護生」の筆跡とみられる。この「護生」は、豊子愷の「護生」の筆跡とみられる。

テキストの選択、テキストに基いた視覚イメージの構築など、豊子愷
の絵画創作のプロセスをうかがう格好の資料になるだろう。

(5) 豊子愷晩年の文学創作と読書

豊子愷は晩年に連作小品群『縁縁堂続筆』を残した。その創作に先
立ち、彼は中国古典を口語訳した文集『旧聞選訳』(未刊)を編んだ。
画作品集の制作時期が接近しており、評価の高い『縁縁堂続筆』の研
究には、『旧聞選訳』は必見の文献であろう。洗練された文体、作品
の主題など、『縁縁堂続筆』と中国古典文学はいかなる関連があるの
か、興味を持たれる。

『旧聞選訳』に材料を供給した書物を旧蔵書に見出すことができる。
『説苑』の表紙には赤鉛筆で丸印が記され、「已摘訳(すでに選んで訳
した)」という文字も見える。ページをめくれば、多くの丸印と、丸
印に鉛筆で斜線をひいた記号もある。これらの記号について、「直線
表示已訳(直線はすでに訳したことを示す)」と、豊子愷本人の筆跡
による書き込みがある。つまり、彼は『説苑』に目を通し、興味のある

るところに印をつけてから、ふたたび口語訳作業を行なったと考えられる。記号を見ていけば、既訳は一八箇所にのぼる。

このほか、『古今説林』第一冊、第三冊表紙にも「已摘訳」との文字が書かれ、巻中に赤い丸印が多く見られた。

『縁堂続筆』の創作に題材を添えた書物に、『幼学句解』がある。豊子愷は晩年の書簡で、この書に言及したことがあり、それはちょうど『縁堂続筆』の執筆中あるいは執筆後の時期である。現存『幼学句解』は一冊のみ、毛筆、万年筆による書き込みが見られる。このうち、ページの上方に万年筆で「牛女」と大きく書いた筆跡があり、それは『縁堂続筆』第三節のタイトルでもある。

このように、残された蔵書は豊子愷晩年の読書歴をよく示し、そのうえ彼の文学作品を解説するための重要な資料ともなるのだ。

見てきたように、「縁堂蔵書」によって、留学時代から晩年にいたるまでの豊子愷のさまざまな側面をうかがうことができる。筆者は自分の関心から、彼の日本留学、西洋文学や日本文学理解、絵画と文学の関連などに留意し、紹介と初歩的な考察を試みた。視点を変えれば、この蔵書がまた異なる問題を解決する鍵になりうるであろう。たとえば、豊子愷が『源氏物語』を翻訳した際に使用した参考書などが現存するが、それらによって翻訳の底本をつきとめ、彼の『源氏物語』理解に照明を当てることができるのではないか。

「父がなくなつてから、兄弟や姉たちがそれぞれ好きな書物を持っていた後に残つたのがこれらの本」だと、豊一吟氏は縁堂記念館に寄贈した蔵書について語るように、今回調査したのは豊子愷旧蔵書のほんの一部にすぎない。とはいえ、本目録を「縁堂蔵書目録」としたのは、豊子愷旧蔵書的重要性を訴えるためであり、今後増補されることを願つてのことである。豊子愷旧蔵書は、豊子愷研究だけでなく、近代中国文化史、日中文化交流史などさまざまな研究領域にとつて貴重な財産となるに違いない。

注

- (1) 豊子愷「還我縁堂」『文芸陣地』第一卷二期、一九三八年五月一日、ここでは『豊子愷文集』文学卷二、浙江教育出版社・浙江文芸出版社、一九九二年六月、五四ページ。
- (2) 豊子愷「控訴日本罪行」『新聞日報』一九五一年三月三日、『豊子愷文集』には未収録。
- (3) 豊子愷「我的苦学経験」『中学生』第一一〇号、一九三一年一月一日、ここでは『豊子愷文集』文学卷一、浙江教育出版社・浙江文芸出版社、一九九二年六月、八五ページ。
- (4) 『Insect Literature 虫の文学』所収「草雲雀」「蟻」「蠅物語」と豊子愷の小品「蝌蚪」「清晨」「蜜蜂」の関わりについては、それぞれ拙論①「響き合うテキスト——豊子愷と漱石、ハーン」「日本研究」国際日本文化研究センター紀要、第三三集、二〇〇六年一〇月、②「アリへの賛歌——豊子愷「清晨」とハーン」熊本出版文化会館、二〇〇七年三月所収、③「自己神話的文学の背景——豊子愷「蜜蜂」とハーン「蠅物語」」平川祐弘編「講座 小泉八雲」新曜社、近刊所収を参照されたい。
- (5) 同書は上海開明書店より、一九三三年四月に刊行された。
- (6) 豊子愷文学に対する夏目漱石の影響に触れた先行研究には、陳星「知我者、其唯夏目漱石乎?（われを知る者、ただ夏目漱石のみか）」『走向世界文学——中国現代作家与外国文学』（曾逸編、湖南文芸出版社、一九八六年）、楊曉文「豊子愷における夏目漱石像」『豊子愷研究』（東方書店、一九九八年）などがある。最近、両者の作品を読み比べ、

表現技法、主題の異同を検討しながら、テキスト間の共鳴を分析しようとする拙論がある。注(4)に挙げた拙論①のほか、「響き合うテキスト(二)——豊子愷の「帯点笑答(ちよつと笑つてください)」と漱石の『硝子戸の中』(二)」「日本研究」国際日本文化研究センター紀要、第三四集、二〇〇七年三月、及び「響き合うテキスト(三) 異国の師の面影——豊子愷の「林先生」と漱石の「クレイグ先生」、鲁迅の「藤野先生」」「日本研究」国際日本文化研究センター紀要、第三六集、二〇〇七年一〇月がある。

(7) 拙論「桃源の理髪店——豊子愷と『草枕』」「文学部論叢」熊本大学文学部紀要、第九八号、二〇〇八年三月。

(8) 豊子愷は小品文半月刊誌『人間世』一九三五年新年号特集「一九三四年我所愛読の書籍(一九三四年 私の愛読書)」アンケートに「板垣鷹穂各種芸術論、漱石全集、楽府詩集」と答えている。第十九期、一九三五年一月五日、良友図書印刷有限公司、六七ページ。

(9) 内山完造「豊子愷先生」初出未詳、一九五六年執筆、内山著『花甲録』所収、岩波書店、一九六〇年九月第一刷、一九八一年九月第五刷、三九八ページ。

(10) 豊子愷晩年の弟子の胡治均には、一九四七年春上海で初めて豊に對面したときのことを回想した未刊原稿「振華旅館」(豊一吟氏蔵)がある。そこで彼は豊子愷が滞在するホテルの窓近くのテーブルに、『夏目漱石全集』、梅蘭芳の名刺、白と黒のコントラストがくっきりした拓本が整然と置かれていた」と記している。『豊子愷年譜』(盛興軍主編、青島出版社、二〇〇五年)によれば、一九四七年三月豊子愷は上海で梅蘭芳の公演を見、そして梅と会い、一緒に記念写真もとった。よって、名刺がこの時にもらったものであれば、横に置かれていた『漱石全集』の入手時期は間違いなく一九四七年三月となる。

(11) 注(7)に掲げた拙論を参照。

縁縁堂蔵書目録

西横偉 林素幸 呉衛峰

縁縁堂記念館蔵

日本語図書

アトリエ社編『ルノアール画集』アトリエ社、一九二九年一月
荒正人ほか著『昭和文学史』上巻、角川文庫、一九五六年四月
伊藤左千夫『左千夫歌集』岩波文庫、一九二八年七月発行、一九四三年二月第一六刷
エドモンド・デ・アミーンチス著、三浦修吾訳『愛の学校』誠文堂、一九二二年二月二六日発行、一九三三年四月一〇日六〇版

大島宗治『独逸語独修』独逸語学会発行、一九一九年三月序文、一九二〇年六月初版、同年一二月四版

尾崎士郎訳『太平記』日本国民文学全集十、河出書房新社、一九五六年一月
岡倉由三郎編『僕の英語辞典』研究社、一九三三年九月
片岡良一、小田切秀雄編集『講座 日本近代文学史』全五巻、大月書店、一九五六―五七年

金子元臣『定本源氏物語新解』上中下三冊、明治書院、上は一九二五年九月発行、一九五六年一月、三七版、中は一九三〇年三月発行、一九五二年七月、三〇版、下は一九三〇年三月発行、一九五六年一月、一四版、扉頁に「石門豊氏」の印がある。

金沢庄三郎『広辞林』三省堂、序文一九三四年三月、「奥付なし」
川端康成ほか訳『王朝物語集』日本国民文学全集五、「刊行年月未詳」
「一九五六年か」

北村季吟原註、猪熊夏樹補註、有川武彦校訂『増注 源氏物語湖月抄』

- 上、弘文社、一九二七年九月初版、一九三三年三月五版
 北村季吟原註、猪熊夏樹補註、有川武彦校訂『増注 源氏物語湖月抄』
 中、弘文社、一九二八年四月初版、一九三三年三月八版
 北村季吟原註、猪熊夏樹補註、有川武彦校訂『増注 源氏物語湖月抄』
 下、弘文社、一九二八年一〇月初版、一九三三年三月六版
 グリム兄弟著、年岡長汀訳注『独和对訳 グリム十五童話』一九一四年六月訳者序、南江堂、一九二〇年
 黒田朋信『芸術概論』弘文堂書店、一九二四年六月
 桑原武夫編『岩波小辞典 西洋文学』岩波書店、一九五六年九月
 ザーリス著、藤原肇訳『ギリシヤ芸術』森北書店、一九四三年九月
 西行著、佐々木信綱校訂『山家集』岩波文庫、一九四二年五月
 佐藤春夫訳『徒然草・方丈記』現代語訳国文学全集第一九卷、非凡閣、一九三七年四月
 三省堂編輯所編『*Sanseido's GEM Dictionary*』三省堂、一九二五年九月初版、一九三四年九月改訂八〇版
 新村出編纂『言苑』博文館、一九三八年二月一九日発行、一九三八年五月一〇日第三〇版
 竹久夢二『出帆』龍星閣、一九七二年八月
 独逸語学雑誌社編『独文読本卷一 講義』精華書院、一九一三年四月初版、一九二一年六月一版
 徳栄寺義漢述、大久保一枝補『譬喩因縁妙辨百題』顕道書院、一九一五年一月初版、一九二五年一〇月第六版
 夏目漱石『吾輩は猫である』下、岩波文庫、一九三八年三月第一刷、一九五六年六月、第一九刷
 夏目漱石『漱石全集』全二〇巻、このうち第一、二、五、六、一五、一六巻はなく、計一四巻、漱石全集刊行会、一九二八〜二九年
 日本漫画会編『漫画講座』第二、三、四巻、建設社、一九三四年
- 久松潜一、山岸徳平監修『源氏物語』日本文学大系、第四〜六巻、上中下三冊、風間書房、一九五五年二〜三月発行
 藤岡作太郎『近世絵画史』創元社、一九四一年九月初版、一九四三年一〇月第三版
 藤原道綱母著、喜多義勇校訂『蜻蛉日記』岩波文庫、一九四二年一月
 三浦白水著『独和对訳 散文詩』南山堂書店、一九一三年二月発行、一九一七年二版
 武者小路実篤『維摩經』日本評論社、一九四二年六月第一刷、一九四三年三月第二刷
 室生犀星ほか訳『王朝日記随筆集』日本文学全集七、一九五六年二月初版、同年五月第三版
 モロオ・ヴォチエー著、大森啓助訳『絵画』〔奥付なし〕（春鳥会、一九四二年）
 山本忠雄『文体論——方法と問題』賢文館、一九四〇年五月初版、一九四〇年八月第三版
 与謝野晶子訳『源氏物語』日本文学全集三、上、河出書房新社、一九五八年七月
 与謝野晶子訳『源氏物語』日本文学全集四、下、河出書房新社、一九五七年三月
 柳亭種彦『修紫田舎源氏』第一〜六編、一冊、大川屋書店、一九一一年六月。（十銭文庫）
 老舍著、内山嘉吉翻訳改編『童話劇 宝船 四幕七場』脚本、一九六三年
 和田芳実『石川啄木 其生涯と芸術』三芳屋書店、一九三七年二月初版、一九三九年一月第一五版

中文図書(書名中国語音順)

徐鉉編『詞苑叢談』下、万有文庫第二集七百種、商務印書館、一九三七年六月
 安東諸娃等著『德累斯頓絵画陳列館』上海人民美術出版社、一九五六年

『東周列国志』奥付には「全書二冊、新文化書社」とあるが、出版年月記載なし。朱太忙序文は一九三三年七月。四冊に製本しなおしたものが現存。

二十五史刊行委員会編著『二十五史』一九三四年九月序文、上海開明書店

二十五史刊行委員会編著『二十五史人名索引』上海開明書店、一九三五年一二月初版

葉慧曉校『孔子集語集解』広益書局、一九三六年四月

朱益明標点、惟公校閱『孔子家語』大達図書供応社刊、一九三四年一二月再版

レーニン著、訳者未詳『列寧文選』全二巻、莫斯科(モスクワ)外国文書籍出版局、一九五〇年

中国人民対外文化協会『麦綏萊勒画展』同協会主催の展覧会図録、一九五八年

魯迅『呐喊』一九二二年一二月序、「奥付なし」、「一九三八年五月六日、広州より銭君匄が漢口に疎開中の豊子愷へ送ったもの、豊子愷の題辞がある」

李清照ほか著『漱玉詞 得全居士詞 陽春集 澹菴長短句』商務印書館、一九三七年六月

呉承恩『西遊記』二冊、啓智書局、「奥付なし」、「一九三五年三月版か」

宋某撰『新編分門古今類事』一、二、三冊、商務印書館、一九三七年

六月初版

『袖珍古書読本 大学 中庸』冊一、「奥付なし」
 『袖珍古書読本 論語』冊三、「奥付なし」
 『袖珍古書読本 孟子』冊五、六、「奥付なし」

英文図書

Gissing, George. *The Private Papers of Henry Ryecroft*, with introduction and notes by Sanki Ichikawa, 研究社、一九二一年一十二月初版、一九三五年一月第八版

Poe, Edgar Allan. *Prose Tales*, with introduction and notes by Minoru Toyoda, 研究社、一九二二年五月初版、一九三五年一月第八版

Turgenev, Ivan. *A Hunter's Sketches*, Foreign Languages Publishing house, Moscow. [奥付なし]

Turgenev, Ivan. *A Sportsman's Sketches*, translated by Constance Garnett, Vol. 1-2, London, William Heinemann, 1916.

Sutra Spoken by the Sixth Patriarch, Wei Lang, on the High Seat of the Gem of Law, (Message from the East), 英訳六祖壇経、大法倫書局、[奥付なし]

英漢対訳図書

Clemens, Samuel L. 著、伍光建選訳『*The Adventures of Tom Sawyer*』安木瑣耶爾的冒險事、商務印書館、一九三四年六月初版。(英漢対照名家小説選)

Cooper, J. Fenimore 著、伍光建選訳『*The Last of the Mohicans*』末了的摩希千人、商務印書館、一九三四年。(英漢対照名家小説選)
 Fielding, Henry 著、伍光建選訳『*The History of Tom Jones A Foundling*』安木宗斯、商務印書館、一九三四年。(英漢対照名家小説選)

France, Anatole 著、伍光建選訳『The Red Lily 紅百合花』商務印書館、一九三六年。(英漢対照名家小説選)

Ibáñez, V. B. 著、伍光建選訳『The Four Horsemen of the Apocalypse 啓示録の四騎士』商務印書館、一九三六年一月版。(英漢対照名家小説選)

Jacobsen, J. P. 著、伍光建選訳『Niels Lyhne ニルズレーニ』商務印書館、一九三六年。(英漢対照名家小説選)

Kingly, Charles 著、伍光建選訳『Hereward The Wake 希爾和特』商務印書館、一九三四年。(英漢対照名家小説選)

Lewis, Sinclair 著、伍光建選訳『Main Street 大街』商務印書館、一九三四年。(英漢対照名家小説選)

Lyton, Lord 著、伍光建選訳『Rienzi The Lion of Basil 羅馬英雄里因濟』商務印書館、一九三四年。(英漢対照名家小説選)

Melville, Herman 著、伍光建選訳『Typee 泰丕』商務印書館、一九三四年九月初版、同年一〇月再版。(英漢対照名家小説選)

Swift, Jonathan 著、伍光建選訳『Gulliver's Travels 伽利華遊記』商務印書館、選訳者による「作者伝略」は一九三三年、「奥付なし」(英漢対照名家小説選)

Tagore, Rabindranath 著、吳致寛訳述『英漢対照愛情名劇 Chitra 謙屈拉』上海商務印書館、一九三三年一月初版、一九三〇年三月第三版

Thackeray, W. M. 著、伍光建選訳『The History of Henry Esmond 顯理埃斯曼特』商務印書館、一九三四年七月初版、同年一〇月三版。(英漢対照名家小説選)

Undset, Sigrid 著、伍光建選訳『Tenny 金奈』商務印書館、一九三六年。(英漢対照名家小説選)

Voltaire 著、伍光建選訳『Candide 甘地特』商務印書館、一九三六年。

(英漢対照名家小説選)

Wells, H. G. 著、伍光建選訳『Ann Veronica 安維洛尼伽』商務印書館、一九三四年。(英漢対照名家小説選)

Wilde, Oscar 著、桂裕、徐名驥訳述『Salomé 莎樂美』上海商務印書館、一九二四年一月初版、一九三四年八月国難後第二版

英和、独和、英独対訳圖書

Barrie, James Mathew 平田喜一訳注『Peter Pan ピーター・パン』研究社、一九三〇年三月。(研究社英文訳注叢書)

Hamerton, Philip Gilbert 著、清水繁訳注『Human Intercourse ヒューマンインターコース』研究社、一九三一年二月発行、一九三三年一〇月第五版、本書は二冊ある。(研究社英文訳注叢書)

Hardy, Thomas 著、平田喜一訳注『The Fiddler of the Reels and On the Western Circuit ヴァイオリン弾き 他一篇』研究社、一九三三年九月。(研究社英文訳注叢書)

Hardy, Thomas 著、平田喜一訳注『The First Countess of Wessex ウェセックス初代の伯爵夫人』研究社、一九三四年一二月。(研究社英文訳注叢書)

Hawthorne, Nathaniel 著、青木常雄訳注『Biographical Stories 伝記物語』研究社、一九二九年一〇月発行、一九三五年八月第一版。(研究社英文訳注叢書)

Heam, Lafcadio 著、荻原恭平訳注『Kwaidan 怪談』研究社、一九三〇年三月発行、一九三六年八月第二〇版。(研究社英文訳注叢書)

Ibsen, Henrik 著、小野秀雄訳『独和对訳 幽霊』南山堂、一九一三年六月初版、一九二〇年一〇月第三版。

Kingsley, Charles 著、武井亮吉訳注『The Heroes 希臘英雄伝』研究社、一九二九年一月発行、一九三六年九月第一二版。(研究社英文訳注叢

書)

Kingsley, Charles 著、佐伯有三訳注『The Water-Babies 水の子等』研究社、一九二九年一〇月版、一九三二年四月三版。(研究社英文訳注叢書)

Kipling, Rudyard 著、福原麟太郎訳注『Just so Stories なるほと物語』研究社、一九二九年一月発行、一九三〇年九月再版。(研究社英文訳注叢書)

Lagerlof, Selma 著、舟橋雄訳注『Gipsy Blood and Other Northern Stories 漂泊人種の血』研究社、一九三〇年九月。(研究社英文訳注叢書)

Poe, Edgar Allan 著、大橋栄三訳注『Prose Tales ポー短篇集』研究社、一九二九年一月発行、一九三六年九月第二版。(研究社英文訳注叢書)

Stevenson, R. L. 原作、左右田実訳注『A Child's Garden of Verses 幼年詩園』研究社、一九三〇年九月発行、一九三三年五月第三版。(研究社英文訳注叢書)

Suzuki Kiichirō, Deutsch=Englische Lesestücke, 2 Buch, Nankōdō, 1919.

梅本誠一訳注『Contemporary Short Stories 現代短篇集』研究社、一九三三年一月発行、一九三六年八月第三版。(研究社英文訳注叢書)

Wells, Herbert George 著、村上貢訳注『Tales of Wonder 驚異の物語』研究社、一九二九年一月発行、一九三三年八月第六版。(研究社英文訳注叢書)

Wilde, Oscar 著、佐伯有三訳注『The Fisherman and his Soul 漁夫とその魂』研究社、一九二九年一月発行、一九三六年十一月第九版。(研究社英文訳注叢書)

Wood, Henry 著、佐伯有三訳注『The Ebony Box 黒檀の函』研究社、一九三三年一月。(研究社英文訳注叢書)

豊新枚(豊子愷の子息、二〇〇五年没) 旧蔵

陳廷焯著『白雨齋詞話』開明書店、[奥付なし]

陶樂勤編『兩般秋雨盦』全二冊、上海大中書局、一九三二年一月

Turgenev, Iwan 著、上村靜淵訳『独和对訳 Erste Liebe 初恋』南山堂、一九一三年一月初版、一九二〇年五月第四版

『歷朝名人詞選』二冊、上海掃葉山房、一九二八年石印
詩集抄本一冊、[「宋千首絶句」上下二冊『歷代白話詩選』「古詩源」上下二冊から抄録したものか]

吳浩然(緑縁堂記念館館員、豊子愷研究者、桐郷市在住) 蔵

『大悲法師禪余集』民国二十一年、林森の題あり、[奥付なし]

一翁『古今説林』第一冊、第三冊、[奥付なし][著者序は一九四八年] 顧元慶編輯『広四十家小説』第一―六冊、上海文明書局、一九一五年五月初版

百一居士『壺天録』上下二冊、進歩書局、[奥付なし]

『墨餘録』[存目]

江畚經編輯『歷代小説筆記選』宋(一)、商務印書館、[奥付なし]

任熊『列仙酒牌』[奥付なし]

『評選圈点 六朝文絜箋註』一九二五年仲夏東陸書局出版、上海江左書林順記印行、一冊(一二卷)、ほかに巻七、巻八―一二の二冊がある。

劉宗周『人譜』民国庚申成都国学研究会重刊、表紙に「三十二年十月購於成都」とある。

『任氏三大家画譜大全』全二冊、一九二六年四月、

『三十三劍客図』上下、[奥付なし]

鄭宗海(曉滄)『粟廬憶語』馬一浮題、私家版、[奥付なし]

夏丐尊、葉紹鈞著『文心』上海開明書店、一九三三年六月初版、一九

三十七年三月九版

『西河詩話 西河詞話』宣統辛亥（一九一）秋上海瑞樓石印、「奥付なし」、「三十七年三月托君甸上海購得（一九四八年三月錢君甸に頼み上海にて購入）」と豊子愷の題字あり

賀天健『字画山水過程自述』人民美術出版社、一九六二年五月

Ernest Grosse 著、蔡慕暉訳『芸術的起原』商務印書館、一九三七年二月

錢元龍『幼学句解』一冊、「奥付なし」

紀曉嵐『閔微草堂』第一、八冊、第七冊は欠本、進歩書局校印、「奥付なし」

葉瑜蓀（桐郷市文聯主席、工芸家、桐郷市在住）蔵

劉向撰、楊以滢校『說苑』商務印書館、一九三七年十二月

張秀民『中国印刷術的發明及其影響』人民出版社、一九五八年二月第一版

豊一吟（豊子愷の末娘、上海在住）蔵

『名人傑作落語集』第七輯、清教社、一九四〇年一二月再版

『明拓索靖月儀帖』私立中華書局函授學校書法函授範本

『瑜伽餓口經』「奥付なし」

潘文彦（豊子愷晩年の弟子、上海在住）蔵

『詞綜』「未見」

『宋詞三百首箋注』上海神州国光社、「未見」

ロシア語図書

Chkanikov, Ch., *Igry i razvlechenia* (Moskva, 1953).

Chienie: Uchebnoe posobie dlia studentov, Ch. 4 (Shankhai, 1954).

Korshunov, M., *Lasnye krinitsy* (Moskva, 1955).

Kuprianov, M. V. et al., *Kukryniksy* (Moskva - Leningrad, 1950).

Nagishkin, D. M. (ed.), *Samyi sil'nyi: Amurskie skazki* (Moskva - Leningrad, 1951).

Petro, Sh., *Kot v sapogakh* (Moskva - Leningrad, 1954).

Poliakova, L. et al. (ed.), *Doktor Aibolit* (1951).

Solov'eva, E. E. et al., *Rodnaia rech': Kniga dlia chienia v chevertom klasse nachal'noi shkoly* (Moskva, 1963).

Sovetkin, F. F. (ed.), *Rasskazy i stikhi dlia vneklassnogo chienia*, Kn. 3 (1954).

Sharbatova, G. Sh., *Arabskie narodnye posloviisy i pogovorki* (Perevod s arabskogo izdatel'stva inostrannoi literatury, Moskva, 1961).

Tolstoi, A. N., *Russkie narodnye skazki v obrabotke* (Moskva, 1954).

附記：この蔵書目録は平成二〇年度日本学術振興会科学研究費補助金（「豊子愷に関する比較文学的研究」基盤C、課題番号20520333）による研究成果の一部である。今回の調査に際し、浙江省桐郷市石門鎮縁縁堂記念館、桐郷市文聯主席葉瑜蓀氏、豊子愷の末娘豊一吟氏、豊子愷の弟子胡治均の長女胡易姿氏、同じく豊子愷の弟子潘文彦氏など多くの方々の協力を得た。記して謝意を表すものである。ロシア語の目録整理については、ペテルブルグ大学文学部専任講師大谷幸太郎氏のご協力に感謝する。